

天地は上下にあつて、太陽と月は未だ地に降りて来ず、土や石は永遠に天に上がらない。君主がたとえ立派な君主ではなくても、長期にわたり軽蔑し続けてはならない。しかしながら、君主たる人が、家臣を土芥のごとく見て、これを土芥のごとく扱えば、家臣も又この君主を「仇を討つべき敵」の如くに見て、謀反をなすことがある。これを逆臣という。君主の政を正さず、逆臣がことを謀れば、国家が亡んでいく端緒となる。国がこのままでは亡んでいくのを見て、君主に諫（いさ）めをなし、その結果、あるいは遁（のが）れ、あるいは諫めて死ぬ。このように竜逢・比干たちや、伍子胥のような者は皆、家臣としての規範である。日本においても藤房卿がその人である。弓馬に携わり、武芸を業とする勇士としては、天下が治まっている時は、ともに栄えるのを第一義とし、亡ぶに及んではともに亡ぶ。悲しむこともなく、喜ぶこともなく、時に当たって義を行う。これを真の智勇とせよ。